

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

敢えて、する教育

「働き方改革」が叫ばれ、学校もそれに呼応して様々な対策に取り組んでいます。

行政は働き方についてのアンケートを実施し、実態の把握に努めています。学校でも行事の精選、事務仕事の軽減などが進められています。しかし今回のテーマは「敢えて、する教育」としました。

子どもとの関係は「たし算」です。関係は教師から作るものです。その機会も教師が意図的に作るものです。そのために「敢えて、する教育」は有効です。

1 芯が丸まった鉛筆を使っている子ども

朝から芯が丸まった「潰れ鉛筆」を使っている子どもがいます。前夜に鉛筆を削っていないことがわかります。はたして、筆箱を開けると、削った鉛筆は一本もありません。

子どもは気にせずを使い続けています。ノートに書かれた「目」は潰れて「日」に見えます。

Q1 潰れ鉛筆を使っている子どもにどんな対応をしますか。

- ① 休み時間に鉛筆を削るように伝える
- ② 鉛筆削りを子どもの机の上に置いて、削らせる
- ③ 子どもの机の上に鉛筆削りを置いて、先生が削る

①では、子どもは「先生に言われたから削る」という意識になります。

教師は子どもを思って注意したのですが、「しかられたからやる・仕方なくやる」とな

ります。これではせっかくの思いやりが伝わりません。

今回のテーマの根底には、子どもとの良好な関係づくりがあります。仕方なくやるのではなく、「やってよかったと気づかせてくれてありがとう」と子どもが思う事が大切なのです。

②でもそれは同じです。違いは、必ず削るということ。しかし子どもがうっかり忘れて、削る必要性を感じていなかったりすると、教師の注意は馬耳東風となります。

ここでは敢えて③とします。鉛筆を削ってほしいのは教師です。それなら、教師がそれを行います。

教師は鉛筆削りを子どもの机の上に置き、すばやくハンドルを回し、鉛筆を抜きます。

「はい、どうぞ」と鉛筆を子どもに戻すと、「ありがとうございます」と頭を下げます。子どもは先生がそんなことをしてくれるとは思っていません。驚きのできごとです。それがお礼に表れます。

そのまま残すだけでもいいのですが、鉛筆を削った良さを実感してもらいたいです。そこで、教師は、「書いてごらん」と促します。先ほどの潰れ鉛筆で書いた「目」は「日」でしたが、今度はしっかりと間隔の空いた「目」になります。「どう」と子どもにも感想を聞くと、「書きやすくて、ちゃんと漢字になっている」と削った芯の良さを実感します。

保護者は、「ちゃんと削りなさい」と文句を言いながらも「貸してごらん」と我が子から鉛筆を受け取り、削ります。「ほら、こうやるんだよ。筆箱にしまつて」と鉛筆を渡します。

教師も保護者と同じことをします。この時間が子どもとの関係づくりの質を高めます。



2 給食の白衣を丸めてしまう子ども

配膳が終わった給食当番は着ていた白衣を脱ぎ、給食袋に入れます。

それらはケースにしまうのですが、蓋が閉まりません。中を確認すると、ボールのように丸まった給食袋があります。蓋が閉まらない原因はそれです。

Q2 その白衣をどうしますか。

- ① 蓋が開まらないままにしておく
- ② 子どもに畳み直しをさせる
- ③ 先生が畳む

教師の腕前診断

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

①のように、そのまましておくのも一つの指導です。不適切さを見せることで、適切さを知ることになるからです。

②のようにやり直しをさせるのが一般的な指導です。

白衣を畳まずに丸める原因は、早く給食を食べたい、畳み方を知らない、畳み方を知っていてもうまく畳めないなど、いくつもあります。

いずれにしても、丸まっていることが気になっていません。「ちゃんと畳んだ」と勘違いしたり、「仕方がない」とセルフ・ジャッジしたりしてしまいます。

やり直しをさせると、「畳んだのに」と不満をもちます。早く給食を食べたいので、丁寧さに欠けた畳み方となり、またやり直しとなります。

③のように白衣を畳んでいる子どものそばに歩み寄って白衣を受け取り、「どれ、貸してごらん。先生が畳むよ」と声をかけます。

子どもは先生が畳んでくれるとは思っていませんので、戸惑いながら白衣を渡します。

教師は、「最初は襟口を合わせて」と手順を口にします。子どもに復唱させ、畳み方を確認させます。

畳み終わると、「袋を開けて」と子どもが持っている給食袋に白衣を入れます。パンパンと叩くと板のように薄くなります。

「はい、どうぞ」と子どもにも返却します。「ありがとうございます」と子どもは殊勝に受け取ります。

「どう、板みたいに薄いでしょ」と自慢気になつくと、「本当だ。先生、上手」と感心します。

再び白衣をケースに戻すと、今度は蓋が閉まります。

教師はふつう「ちゃんと畳みましょう」と呼びかけるだけです。それに対し保護者は、「貸してごらん。こうやるんだよ」とやってみせます。

教師が白衣を畳む話には後日談があります。週末には白衣を持って帰り、洗います。きれいに畳まれた白衣を見た保護者が、「上手に畳めるね」と我が子をほめたそうです。子どもは「違うよ。先生だよ」とあつげらんと答えたのですが、保護者は「そんなことまで先生がやってくれるの」と驚き、教師への認識を新たにしたそうです。

さらに、「じゃあ、畳み方の練習をしよう。先生はどうやったの」と立ったままでの畳み方の練習をしたそうです。

先生は「じゃあ、畳み方の練習をしよう。先生はどうやったの」と立ったままでの畳み方の練習をしたそうです。



隣のクラスの子どもが配膳を終わり、白衣を畳むために廊下に出てきました。この子は昨年度担任した子どもです。子どもと目が合い、私が白衣を畳む真似をすると頷きます。「白衣を畳もうか」という私からのサインだと気づき、スタスタと私の元に来て万歳をします。白衣の袖口を持つと、子どもはしゃがみます。すると、するつと白衣が脱げます。

その子の白衣を畳むのですが、恥ずかしがるどころかうれしそうに立っています。白衣を給食袋に戻すとき、「明日も？」と聞くと、「うん」と頷きます。

私は子どもの成功場面よりも、できない・失敗する場面に教師としての存在価値を覚えます。授業では何をどう教えようかではなく、「どこで躓くだろうか」と予想して教材研究をします。

子どもが成長するスタートに立ち会えるのです。日に日に成長する時間を共有できます。できないこと、してほしいことはしてやりま

す。すると子どもは、「先生はこんなに僕(私)のことを大事にしてくれるんだ」と確認できます。子どもは一度教えたからといってできるもの

ではありません。仮にできて、いつも丁寧に行うとは限りません。

読者の皆さんは、「敢えて、する」は甘やかしてはないかと思われるでしょう。私は敢えて甘えさせています。甘えは「自分がしてほしいことを受け入れてもらうこと」です。甘えられると思うから安心できます。相手への信頼です。感受は甘受です。

子どもは信頼する人には心を許します。甘えはやがて自立につながります。「敢えて、する教育」はその一助となります。

子どもは信頼する人には心を許します。甘えはやがて自立につながります。「敢えて、する教育」はその一助となります。

子どもは信頼する人には心を許します。甘えはやがて自立につながります。「敢えて、する教育」はその一助となります。